

理論編
実践編

宇宙意識という視座

Dr. for the Earth

地球のお医者さん

平井孝志

オーガニック農法・農業編・畜産編

オーガニックで健康ライフ

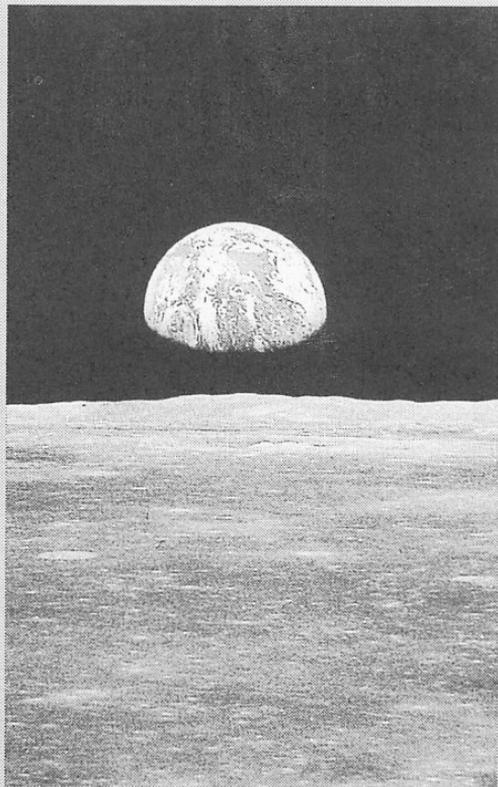
生命の系

循環と共生の根拠

科学と経済の陥穽

物質の系

第一部 理論編



第3章 生命の系 — 循環と共生の摂理

勝者なき競争

前章で、物質の系は、自然に生命の系を分割することによって発達してきた科学と、その活用形である科学技術が経済とあいまって成り立っていると述べた。

科学技術や経済の発展は、有限の環境にあるにもかかわらず、とどまることを知らない。経済にとって停滞は、即ち悪であり、発展し続けることが命題である。そこに有限の環境と無限の発展という矛盾が生じた。

ところが生命の系にはその矛盾がない。生命の系に属するものは自ずと成長が止まるからだ。人類でいえば、身長が二メートル以上の人はいるが、三メートルを超える人はいない。一〇〇メートルを一〇秒足らずで走る人はいるが、五秒で走る人はいない。一〇〇歳を過ぎても健康の方はおられるが、二〇〇歳までは生きられない。植物も同じで、高さ五〇メートルを超す大木はあるが、五〇〇メートルに達する大木はない。一夜にして種子から花を咲かすものもない。

遺伝的な要素だけではない。ある種が勢力を広げようとすれば他の種がそれを阻止しようとする。生存競争ともいうが、競争に勝ったものが他方を絶滅に追いやることはまれである。単に二者間での競争というものも少ない。ほとんどの場合、極めて多数の関連要素があり、互いに均衡を保っている。

自然界に一人勝ちは基本的にないのである。人類だけがその例外的存在なのだ。

輪廻する海

地球上に生命が誕生したのは今から約四〇億年前のことだといわれている。そのようなはるか昔から存在し続けてきた世界には、自ずと築き上げられてきた法則といったものがある。

そのうち最も重要な一つが循環系だ。地球上の循環系は大きく三つに分けることができる。

大気の循環、水の循環、有機物の循環である。これらのほかにも地球中心部からのマントルの循環や地磁気の循環などがあげられるが、不明なところが多く、本書では除外しておく。

総合すればエネルギーの循環といえる三つの循環系は、誰でも多かれ少なかれ知っている。大気と水の循環は、テレビでお馴染みの天気予報を見るだけでも簡単に理解できる。

台風に限らず、南太平洋の海洋から蒸発した水分は上昇気流に乗り、地球の自転で生じる偏

西風によって日本方面にやってきて雨を降らせる。海表面と大気中の水循環は理解しやすく、気象衛星が打ち上げられてより一層身近になった。

海にはもう一つの海流がある。深層海流と呼ばれるこの流れも地球上のダイナミックな循環系の一つだ。

深層海流は、米国の核実験による核物質汚染が海水域でどれくらい広がっているかを調べる途中で発見された。ほとんどの海水域で表層にしか発見されなかった放射性物質が、メキシコ湾流の終着点である北アイルランドでは数千メートルの深海から見つかった。海表水がこの地域で深海へ沈み込んでいる証拠となった。

北アイルランド付近の海水は冬期には凍結する。凍結するのは海水中の真水だけだ。塩分は放出されるので海水中の塩濃度が上昇し、海水の比重は重くなる。重くなった海水は凍結するほどの寒さで冷やされ、さらに海底へと沈み込みが生じる。

沈み込んだ海流は地球の自転によって西へ押し寄せられながら、南北両アメリカ大陸の東側の海底を南下し、南極大陸北側で進路を東に変える。流れはオーストラリア大陸で二分され、西側を通過した流れはインド洋へ、東側を通過した流れは太平洋へと赴き、再び表層海流と合流する。その周期は実に二〇〇〇年ということだ。

このような動きを見せる深層海流は「海のベルトコンベア」と呼ばれ、塩濃度が〇・一％低下しただけで沈み込みの流れが鈍るといわれている。

二酸化炭素などによる地球温暖化は、陸上の動植物への影響にとどまらない。地球の平均気温が上昇すれば、温帯地域では活発に水蒸気が産出され、寒冷地域で大雨（真水）を降らせる。また永久氷河は溶解し、それら大量の真水は、確実に海水を薄めてゆく。

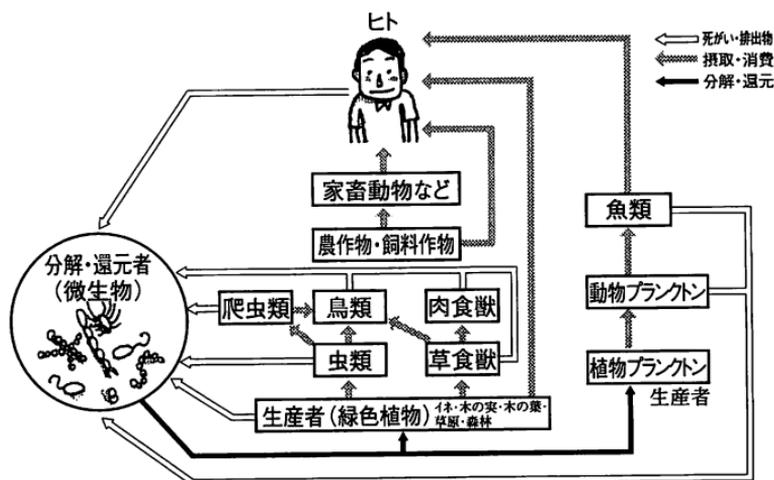
一三〇〇万年前に突如訪れた氷河期は、この海のベルトコンベアが機能しなくなったためといわれている。その頃、北アメリカ大陸をおおっていた大氷河地帯が温暖化により真水湖となり、決壊して一気に海に流れ込んだため塩濃度を下げたのだ。植物は枯れ、大食糧不足となり、多くの動物たちは滅んでいった。

連鎖が断たれるとき

大気と水の循環は、有機物の循環も支えている。有機物の循環の一つが、有名な食物連鎖である。

食物連鎖に登場する動植物は、次の動物に食べられなくとも、寿命を終えて地上のものは土に還り、川や海のものには水に還る。土や水に還るには、食物連鎖の鎖を逆回りにした順序で進

図1 食物連鎖の仕組み



み、最後はさまざまな微生物によって目に見えないほど小さな栄養素にまで分解される。地球上には、重さにして目に見える動植物の数十倍以上の微生物が住んでおり、有機物の循環系で重要な役目を果たしている。

森林には、二酸化炭素を吸収（同化）し酸素を供給するという循環系とともに、岩盤のミネラル成分を吸い上げ、腐葉土の中に生息する多種多様な微生物が落ち葉や枯れ枝などを分解し、地衣類や樹木が吸い上げたミネラル成分を循環させるといった機能もある。ミネラルを始め、栄養素、腐植、微生物などが豊富な森林土壌は、下流域の生態系にとって有効な資源の宝庫となっている。

森林は国土保全のうえでも重要である。日本

は国土の大部分が山林で平野部が少ない。森林は降り注ぐ多量の雨を一時的に貯留し、表土の流失を防いでいる。前述した草津市の天井川は、源水系の森林伐採が起こした人為的災害の結果でもある。

川が氾濫するならばダムを造ればよい。発電もできるし、農業用水にも工業用水にも使える。公共事業で経済も活性化する——などという「物質の系」からの発想は、自然には当てはまらない。

科学と技術の粋を集め、ナイル川に建設されたアスワンハイダムだったが、ダムができたことで農地に定期的な氾濫による肥沃土の供給と有害物質の除去がなされなくなったため、農作物の収量が激減した。ナイル川河口域のエビを始めとする漁獲量も同じように激減したという。ダムにはその分の土砂が大量に堆積した。砂漠に灌水を施し農業生産を向上しようとしたが、これも失敗であった。灌漑水路が有害寄生虫の温床となり、病気が蔓延したのだ。

アスワンハイダムは、六〇〇〇年以上続いたエジプト文明を数十年で崩壊させるという「世界最大の愚挙」のシンボルとなった。生命の系に物質の系を単純に持ち込んだ結果である。

日本各地でも同様のことが起こっている。建設着工以来、その目的をコロコロ変えながら行われる干拓事業やダム建設などの公共事業は、ご承知のとおりだ。

現代教育により若干なりとも洗脳を受けている私たちは、科学的データの集積や再現性の実証がなされていない頃の「先人の知恵」を、単なる言い伝えぐらいにしかり理解していない。しかし科学的手法のない頃だからこそ自然を素直に学ぶことができたということも事実である。

例えば、自然学の先人は次のように言い残している。

「魚を得むと欲せば、まず森を肥やせ」

現在、漁業組合とか農業組合とか同業種での組合が主で、それぞれが独立して機能しているため、ほとんど交流がないのが実情だろう。森の恵みは、下流域の農地、畜産動物の飲料水、漁獲量に大きな恩恵をもたらす。流水域での情報交換や懇親会からでも交流を始め、協調することが必要であろう。

また森林保全の責任を赤字行政（林野庁）だけに背負わせることは、下流域住民（国民）にとって得策ではない。一機が何十億円もする鉄の塊を国防費として使うより、国土（森林）を守るためにその金を使った方がよい。

戦後の林野行政の経緯は別として、林野庁が国有林からの材木を売った金額だけを収入とし、人件費などを勘案して赤字だというのはおかしい。国土と下流域の防災、栄養素の供給、漁獲量まで左右する森林は、国防問題でもある。単に売上と経費を比べるなら、防衛庁を始め他の

省庁も皆大赤字だ。

巨額な赤字をかかえた林野庁が解体されるなら、防衛庁に組み入れればよい。自衛隊員が、森に実弾を撃ち込む演習だけでなく、ジャングル戦を想定して下草狩りや枝打ちなどを行えば、よりよい材木が取れるし国土も防衛できる。

国土保全のために税金が使われるなら、大企業保護のための金融安定化政策より、よほど国民の理解を得やすいだろう。

循環を生きる

生命の系の中に生きるものは、地球上の壮大な循環系を体内に取り入れた絶妙な構造をしている。

人体を例にみてみよう。人体は、骨格、指揮命令系統である脳と神経、六〇兆個といわれる各細胞に栄養と酸素を運び老廃物を持ち去る血管系、体外からの侵入者を阻止するリンパ系、それらから持ち込まれた老廃物を浄化する肝臓、腎臓、脾臓など、酸素を取り入れ二酸化炭素を排出する呼吸器系、エネルギーとなる食物を消化し老廃物を排出する消化器系などのほか、筋肉や皮膚で構成される。これら全ての系や器官は、誕生したばかりの乳児の体の中にほぼ完

成されている。

驚くべきことではないか。私たちの体の中で六〇兆個もの細胞が、絶え間なくハーモニーを奏で、一瞬一瞬に秩序だつて各々の役目を果たしている。どの器官を取り去ってもイノチは維持できない。

コンピューターの進歩には目をみはるものがある。大腸菌の遺伝子情報は全容が解明できてきたし、ヒトの遺伝子情報を全て解明しようという計画も進行中である。

しかし今ある地球上の科学や技術の全てを結集しても、秋の野に舞うトンボの羽根も作れない。ましてや「イノチ」は生み出せない。

生産が排水、排気、廃棄物などの排出をとまなうのと同じく、動植物の呼吸や代謝も排出物を生み出す。排出物はいずれも自然環境のもつ浄化作用を前提としているという点で共通している。

私たち人間は、酸素を吸って二酸化炭素を排出する以外に、食物を摂取して糞尿を排泄している。排泄物は汚いものとイメージされがちだが、生物である限り不可欠の生理現象であるものを「清潔」「不潔」と二分化して考えるだけで済ましてはいけない。高貴な人類という認識や人間としてのプライドを捨てる必要はないが、動物としての生理的な一面からみれば人間と

はただの「ウンコ製造機」でしかない。そう思うことで、私たちは卑下することもなければ威張ることもない。毎朝の排便に合掌をすればよいのである。

バランスを保っている自然環境の中では、二酸化炭素は植物や光合成微生物の炭酸同化作用によって、糞尿はさまざまな微生物によって分解され、生体を再構成する要素として用いられ、他の生物に吸収されたりしながら循環系のルールを走り続ける。

この意味では、高等生物になればなるほど自然環境という他の生物の集合体への依存が強まるといってよい。生物は自分の体内で消化できなかったものを排泄し、食物連鎖を成立させる要素として自然界に還元し、再び自らの体内に取り入れることができることを前提としているのである。

言い換えれば、生物は自然環境に浄化作用と必要物質の供給も求めている。しかも、循環系は途切れてはいけないので、「恒常性」ということも前提になる。

現在の気候は、地球上の歴史の中で高温安定期にあることがわかっている。月面のように昼夜の温度差が大きくては生物は生き延びられないし、過去の地球にたびたび訪れた氷河期よりも現在のようないくつかの気候で安定していることが望ましい。

農業も環境の恒常性に頼っている。コメにしても野菜にしても、春には春の気温と降水量、

夏には夏の陽射しと気候があつて初めて栽培ができる。これが、カラ梅雨だったり、冷夏で日照不足になれば、作物は順調には生育しない。氷河期にでもなれば露地栽培はほとんど不可能だろう。住宅の構造や衣類にしても、ここ数百年來変わらぬ日本の四季を前提としている。

生命融合進化論

生命を維持するためのカギは他との共存共栄である。体外環境についてはこれまで見てきたとおり、自然環境に保証された循環系の中で、環境の許容量の範囲内であればという条件付きで、人間は他と共存共栄できる。

体内環境も既に共生関係を営んでいる。生命誕生から約四〇億年という歴史の中で、人体には立派な共生関係が出来上がっている。その一つは細胞内や臓器で営まれる微生物との共生だ。細胞の中の核には、身体を構成する全ての情報を内包した遺伝子がある。その膨大な情報^{II} 遺伝情報を記録しているのが、たった四種類の物質であるということにも驚かされるが、ミトコンドリアや葉緑体は核とは違った遺伝子をもっており、それが形質遺伝する^{*}ということにも驚かされる。

このことから、ミトコンドリアや葉緑体は、何十億年前には別個の生命体であったものが

* 生物の形態的な要素や特徴が遺伝すること

融合したのではないかとする進化論が導き出されている。それはダーウィンの唱えたものとは全く異なる進化論だ。

生命、特にバクテリアなどの生物は遺伝子レベルでの情報交換が行われており、生命体融合の話も絵空事ではない。

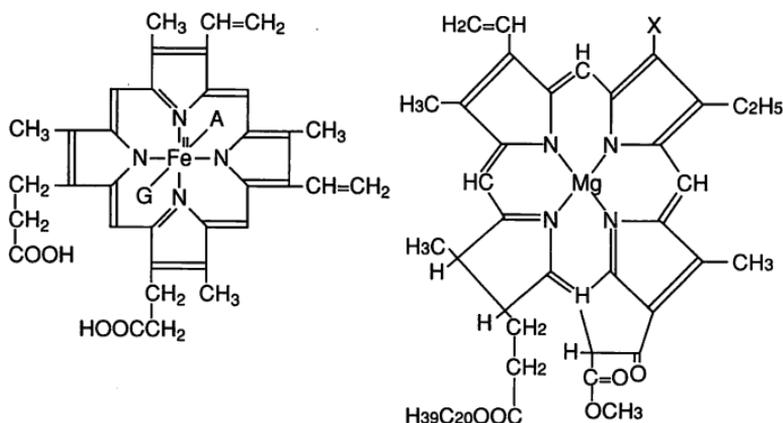
一九六六年、アメリカの動物学者クワン・ジュウオンは、実験に使用するため大量に培養していた単細胞生物のアメーバを誤ってバクテリアに感染させてしまった。感染したバクテリアは大半のアメーバを殺したが、生き残ったアメーバもいた。

生き残ったアメーバを調べてみると、未感染のものほかに、バクテリアを体内に取り込んで共生関係を持つようになったものがあつた。しかもバクテリアは細胞分裂した二つのアメーバの中でも生き続けるようになり、この融合生命体からバクテリアだけを取り除くと、アメーバ本体も死んでしまうことがわかつた。別の生命体同士が一つに融合したのだ。

最近、食中毒の原因としてよく取り上げられる病原性大腸菌O157は、赤痢菌と同じ毒素を出すことがわかつている。O157の遺伝子を調べると、赤痢菌の遺伝子の一部が組み込まれていたという。*ファージによって遺伝子を組み換えられたのだろう。

このように一部の遺伝情報を組み換えたり、基幹元素を入れ替えただけで違う物質となる現

図2 左がクロロフィル(葉緑素)、右がヘモグロビンの構造図



* バクテリオファージ。細菌を宿主細胞とする一群のウイルスの総称。細菌ウイルス、または単にファージと呼ばれることも多い。

象があることは、現在では不思議なことではなくなつた。

酸素に関係する細胞は、植物では葉緑素、人間ではヘモグロビンだが、葉緑素はマグネシウムを、ヘモグロビンは鉄を中心に構成されており、その構造は瓜二つである。なぜこのような関係にあるのかは定かではないが、葉緑素やヘモグロビンなどは、元は独立した原核生物であつたものが何らかの理由で他の生命体と融合し、細胞を構成する機関となつたと考えられている。

一〇〇兆 vs. 六〇兆

細胞内に取り入れられ融合した関係ではなく、現在でも立派に個々独立して(?)活動している微生物との共生関係もある。皮膚常在菌と腸

内微生物だ。

皮膚常在菌は皮膚に付着し、有害菌から身を守る鎧よろいの役目をしている。腸内微生物は、食物に付着した有害菌を繁殖させないように内から身を守っている。皮膚常在菌は全身の皮膚、眼球、鼻や喉の粘膜に住んでおり、腸内細菌は主に大腸にいる。

腸内の微生物は、ざっと一〇〇種、一〇〇兆個。それらを一列に並べると地球を二周する長さとなる。全ての種が人畜無害というわけではないが、大多数は無害なので、人間との共生関係を営むことができる。

私たちは殺菌消毒されたものだけを口に入れてきたわけではない。生の食物や肉、魚介類も食べてきた。それらには当然、多種多様な微生物が付着しており、胃酸などの強酸でも殺せないものもある。ほか物理的に免疫作用を逃れてきたものも腸に侵入する。

しかし、人間と共生関係を営む一〇〇種もの腸内細菌の中に新種の微生物が一匹だけ紛れ込んだとして、その微生物が腸内の栄養素を糧にして大勢を占めることができるかというと、決してそのようなことはない。一人の支持者も持てない候補者が議員に当選できないのと同じだ。数が多いものが大勢を占めることができるという、大数の法則とでも呼ぶべきルールが生物界にはあるからだ。

また、宿主である六〇兆個の細胞の塊が死に至ろうとも、自分たちが生き長らえるためには手段と将来を考えないという微生物もいる。やがては宿主とともに自分たちも死滅することになるのだが、目先のことしか考えられないので、仲間の数を増やすことに熱中し、増えれば増えるほど好き勝手を行うというものもいる。これは何も微生物に限った話ではない。人間の中にも似たような輩が多いのはご存知のとおりである。

腸内微生物といえば、食中毒のニュースを耳にしたとき、必ず感じる疑問がある。同じ食事をしたにもかかわらず、なぜ発病した人と発病しなかった人がいるのかという疑問だ。発病された方には申し訳ないが、発病した人は不運で、発病しなかった人は幸運だったと、単純に考えてよいのだろうか。

発病原因菌の摂取量、体調や抵抗力、免疫力など比較すべき要素は多々あるが、例えば腸内細菌のバランスはどうだったのだろうか。

長寿で知られる村に自動車道路が開通したら生活習慣病が増えた、と聞く。胃腸の強い人ほど健康だともいう。長寿で知られるヨーロッパのある村では、村人が発酵食品であるチーズをよく食べ、彼らの腸から一般には存在しない有益な腸内細菌が見つかってもいる。日本でも長寿村の秘訣は発酵食品や穀類を中心とした粗食であることが多く、腸内常在菌のバランスが良

好きなことがうかがえる。

現代医学をも凌駕する^{りょうが}医学的合理性に基づく簡単な治療方法で、しかも高い治療率を誇ったことで知られるエドガー・ケイシーは、疾病の八割以上は腸内の不全によるものだと言っている。そのようなことから、腸内細菌と人間との共生の形態は、他方に何らメリットを与えないコバンザメ型の「片利共生」ではなく、受粉を手伝う一方で蜜を吸うハチと花に代表されるような、双方でメリットを享受する「共利共生」になっていると考えられる。

そう考えると、私たちの身体を構成する細胞の数は、一般にいわれている六〇兆個に、一〇〇兆個の腸内細菌を加えた数となるのかもしれない。

8

ここでちょっとコーヒーブレイク。

私たち人間と腸内細菌との関係は共生関係であると述べた。しかしながら、筆者の中に「果たしてそれでよいのだろうか？」という疑問があるのを正直に告白しなければならぬ。

第1章で環境をとらえるさまざまな視座について見てきたが、腸内細菌との関係を「共生」という視点でとらえるのは、人間中心の偏った考え方ではなからうか？ 微生物の側から見れば、私たち人間は彼らのためにうまうまと奉仕させられている「道具」に過ぎないのかも…。

現在の私たちの生活も原始時代の生活も、基本的な様式はあまり変わらない。動物として最も外敵から襲われやすい時間帯は、眠っているときだ。だから巢を作り外敵から身を守る。この巢のことをわれわれは家と呼んでいる。その中は比較的安全なので、子育ても家の中でする。孤立無援で生活するより、集団で生活する方が、外敵に対抗する力も強くなるし、食糧の確保も容易になる。こうして家々が集まり、村が作られる。自らの肉体だけで難しいことは道具を作って対処する。狩猟用の犬、農耕用の牛や馬も利用する。

やっかいなのは大自然だ。中でも寒さは大敵だ。衣服を作り、寒暖の差から身を守る。家も頑丈にするとともに、すきま風が吹き込まないようにして、火を焚き家全体を暖める。現代でいえば、電気仕掛けの温度調節機（エアコン）も登場して久しい。

狩りや農耕というものもあるが、鶉飼いや鷹狩りなど他の動物を手なずけて食糧を確保させる方法もある。

そのような集団生活を営むうちに、分業体制ができあがる。マンモスのような大きな動物を仕留めようとする者、衣服を作ることが得手な者、動物を役使することが得意な者などである。それぞれが得意分野を生かし、不得手な部分を他に助けてもらいながら共同生活を送る。

*一八七七年、米ケンタッキー州生まれ。一九四五年没。簡単に効果的な治療法を多数口述した。その速記録はバージニアビーチのARE財団に保管されており、多くの医学者の研究対象にもなっている。

このようなストーリーは人間の生活をとらえたものだが、もし微生物が主人公ならどうなるだろうか。

身体はとても小さい。外敵にはすぐ負けてしまう。だから集団で生活することが基本だ。大ききより数で勝負する。何百何千何万何億何兆と仲間を増やす。

身体が小さいから温度に敏感だ。とくに寒さは身に沁みる。暖房器具が欲しい。常に過ごしやすい温度が理想だから、恒温器が良い。

小さいが故に移動するのも大変だ。一メートルが永遠の距離のように思える。自動車が欲しい。飛行機でもよい。とにかく移動する乗り物が欲しい。同じ所に留まっても今日の食事にありつける可能性は低いからだ。

幸い、多くの仲間がいる。それぞれ食事の好みは違うが、いずれも一騎当千の技術者たちだ。乳酸菌やビフィズス菌など有名な者もいる。どこから来たのか悪玉菌も混じっているが、静かにしている間は目こぼししてやろう。

さて、時は今をさる数十億年前、微生物の今後の生活を考える会議が招集された、かどうかはわからないが、先にあげた問題の解決策を話し合った結果がまとまった。自らが動かなくとも、待っていれば食事が降ってくる仕組みを創ろうという壮大な構想だ。

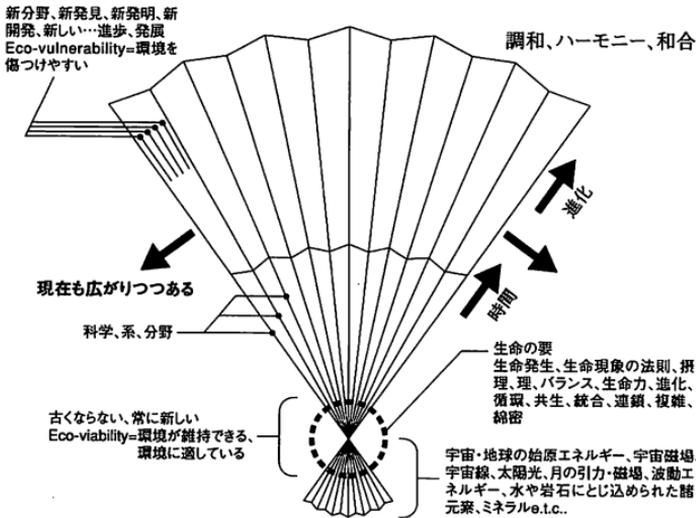
以来、数十億年かかったが、今、微生物は動物の胃腸を住みかとし、体温という適温に守られ、雨風をしのぎ、毎日の食事を得ている。その食事は食べやすいように、あらかじめ小さく噛み砕かれており、外敵が侵入しないように胃酸で消毒されている。

食べ物が乏しくなったら腸壁をみんなで叩く。それは空腹を伝える信号となり、脳へ届く。空腹を感じた動物はノソノソと起き出し、新たな糧を求めて活動を始める。

微生物は宿主に対し基本的に放任主義だが、時には厳しく手綱たづなを引き締める。動物がろくでもない物を食べたときがそうだ。皆で作業をポイコットし、激しく腸壁を蹴飛ばす。それは激しい痛みとなり、下痢をした動物は二度とそのような物を食べないようになる。学習させるのだ。動物の中でも脳味噌の大きい者は「共生関係を営んでいる」などとほざいている。どうも脳味噌の大きさだけが取り柄で、頭が良いとは言いがたいようだ。ここ数十年でその動物を住みかとする仲間たちは随分苦しい思いをしているらしい。

それは、この動物がここ数十億年の歴史にない物質を好んで食べるからだ。科学という手法らしいが、そこから生み出された物質はどうも苦手だ。美味いと感じるが体に悪いのではなからうか。そのためかどうか定かではないが、O157という悪玉菌が世を騒がせている。騒いでいる動物の仲間も、すぐキレたり、ナイフを振り回したりしているらしい。何度も経験して

かなめ
 図3 扇の要論、概念図



いる世紀末だが、来世紀はどんな世の中になるのだろうか？

扇——合一の奥義

生命の系は共生と循環、四〇億年という途方もない時間によって培われた理ことわりによっている。その中から生み出された物質の系は、ガン細胞が有限の身体の中で無限に増殖し、宿主を死に至らしめるかのように拡大し続けている。

有限の環境の中で無限の増殖は許されない。人間が作った物質の系は、生命の系の理を適応することで生命の系を補完し続けることができるはずである。そうしなければ、人類に未来はない。

生命の系と物質の系を包括的に概説する「扇

の要^{かなめ}」論を利用して、未来への展望を探ろう。

扇の要の部分はイノチの誕生や時間軸の出発点、自然環境である。そこから扇の先端に向けて時間、進化、科学が進んでいると考えてみる。

生命の系は複雑なので、さまざまな分野に分割し、その中でまた細かく系を分けて調べられてゆく。そうすると、先端はどんどん広がる一方で、先へゆくほど系を狭く単純にする必要が生じてくるのがわかる。

そこで、今までは扇が三〇度ほどしか開いていなかったとすると、それをさらに広げてゆけば、新しい分野が生まれ、新しい系が誕生する。扇の新たな広がりから生み出された技術は最先端技術と称賛され、資本家の手によって生命の系の中で実用化される。そうしてそれまで不可能とされていたことを可能にし、より便利なものを世に送り出す。

しかし、新しい問題を解決する一方で、さらに別の新しい問題を発生させるのは必ず新技術だ。生命の系から遠く離れた科学や科学技術は、生命の系から遠ざかることでその地位を確保しているように思える。扇の先から生み出されたものは、生命の系の理に従うことができるのか、また将来において発生するかもしれない扇の要に反する課題を解決しているのかどうか、それらの解を満たすまで世に出すべきではない。

最新の技術だから素晴らしいとか、法律に適合しているからよいとか、そうしたことが判断基準の全てであってはならない。最新の科学や技術にすばやく適応できるほど速やかに法律が改正されるわけではないし、問題が起こるまで行政や政治家が動かないのは誰もが知っている。技術者や資本家は、将来に対する責任を明確にしていかなければならない。現在の自然環境と将来世代への責任を、不備な法律を盾に取ったり、独善的な経済原理だけで回避してはならない。

また消費者としては、生命にかかわる問題が最新の技術や一つの資材で一挙に解決できるとする「売り口上」に惑わされてはいけない。日頃からモノにとらわれた見方をしていると、生命の系の存在すら忘れ去ってしまう。科学と経済がもたらした豊かな物質によって、心の豊かさまで埋め尽くされてはいけない。ある先人は次のような言葉を残してくれている。

「大切なものは目に見えない。

空気、熱、光、エネルギーも見えない。人間の心や愛、信頼、友情も見えない。

見えないものによって生かされている。

そのことが見えない」

私たちの理想は何か。貧窮する地球環境と限界を露呈している世界経済のもと、価値観の変

革Ⅱパラダイムシフトが必要だと言葉だけが独り歩きしているだけで、どこへどのようにシフトしてよいか明確ではない。

私たちが未来に対し責任を全うするためには、生命の系の理から勝手にはみ出していかないよう物質の系を制御し、生命の系と物質の系がバランスのとれた両輪となるべく人類の英知を結集してゆくことである。

生命の系と物質の系の合一こそが次の世紀に向けたパラダイムシフトであり、そこから人間が築いてきた社会システムの各所の歪みが変わされてゆくことになる。

他にもさまざまな手法や、場面ごとに異なる取り組みができるだろうし、既にもっと素晴らしい理念が提唱されてもいることであろう。文化や伝統、生活習慣や宗教、気候風土などによっても違ってくることもあるだろう。

それはそれでよい。人が織りなす社会やさまざまな分野での取り組みを画一化させることはできない。私たちが目標とするところが同じであれば、道程は多少違ってても一向に差し支えないのである。

生命の系と物質の系の理想が同じように、「人類は同じ思想を抱くことはできないが、同じ理想を抱くことはできる^{*}」のである。

* 「奇跡の人 エドガー・ケイシー」(ミラード・ジェフ、十葦りん訳、霞ヶ関書房)

ご注意

- 1 掲載文書は執筆時の生データを基にしていますので、推敲を経て実際に出版された文章とは若干違う場合があります。悪しからずご了承下さい。
- 2 リンクはどのページでも確認不要です。
- 3 商品宣伝・商用目的の引用についてはお断りする場合があります。
- 4 本サイトに掲載されている記事・コラム・解説文・写真・その他すべての無許可転載を禁止します。あらゆる内容は日本の著作権法及び国際条約によって保護を受けています。